

巻頭言

生活科学部長 加藤 昌彦

ここに「生活の科学」をお届けいたします。実は、本巻が終刊号となります。

終刊号の巻頭言においても前巻に続き、「論語」を取り上げてみたいと思います。ご存じの通り、論語は孔子の教えを弟子達が書き留め、人の生きる道や、人としての考え方について記されたものです。特筆すべきは、名言といわれる文（章）は、短いが故に、読む人によって様々な解釈が可能なことではないでしょうか。

「子曰く、学びて思わざれば、則ちくらし。思いて学ばざれば、則ちあやうし。」

私は、「知識や情報をたくさん集めても、あるいは教えていただいても、自ら考えることをしなければ（それらをどのような利用すれば良いのか分からず）、せっかくの知識や情報を活かすことはできない。一方、十分な情報を収集せず知識も不十分なまま、自分自身の常識範囲内でのみ考えを巡らせるならば、それは単なる独善であり身勝手な考えになってしまう」と解釈しています。すなわち、知識と情報、思考のバランス感覚が重要だということに他なりません。なんと、現代人の本質を言い当てていることか、感動しました。

さて、「生活の科学」に話を戻します。それぞれの筆者は、客観的な情報・データを集めたうえで、それらをきちんと考察し文章化しています。さらに、読者の皆様に読んでいただき、筆者の考え方に対してのご意見をいただくことにより、独善的な考え方に走らないで済みます。一方、読者の皆様は「生活の科学」を通して新たな情報を手に入れることができ、こうした情報・データを基に、皆様に必要な思考を色々と巡らすことができると思います。こうしてみると「生活の科学」は、まさに筆者と読者のウイン・ウインの関係を築けるはず、築けているものと確信します。

本誌は、この42年間、衣食住の分野で活躍されている読者の皆様に、梶山女学園大学生活科学部の教員が、どのような研究に取り組んでいるのか、研究成果にはどのようなものが見いだせたか、を知っていただきたいとの思いから生まれました。しかし、現在の情報化時代、AI時代の情報伝達としては、どうなのだろうか？もっと現代に相応しい情報伝達の手段があるのではないか？私自身もまた、「思いて学ばざれば、則ちあやうし」と、なりませんよう、この「生活の科学」をさらに発展させるための時間をいただきたいと存じます。そうです。ご推察のとおり「生活の科学」の発展的解消です。本誌が皆様のお役に立てるよう、さらなる発展のために。

近い将来、進化した「生活の科学」とともに、皆様と再びお目にかかれたいことを確信しております。長きに亘り、ご愛読いただき、ありがとうございました。

令和元年 11 月吉日